

2023 AC

The 2<sup>nd</sup> Celebrate Hanukkah

原語で味わう創世記第2章

12/24~31

No.9 29日(夜)

# 「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】ヨハネの福音書5章39～40節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

●イエシュアは私たちに聖書を正しく解釈することを教えています。

それは、イエシュアという鍵を入れ込むことで、初めて言わんとすることが見えて来るということです。

# 「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】イザヤ書34章16節  
主の書物を調べて読め。  
これらのもののうち、どれも失われていない。  
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。  
それは、主の口がこれを命じ、  
主の御霊がこれらを集めたからである。

※ 「自分の伴侶」 (=雌も雄も) にたとえられているのは、神のことばの証言が必ず伴侶のように置かれているからです。「調べて」は「尋ね求める」の「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)、「読む」は「出会う、見つける、向かい合う」の「カーラー」(קָרָא)です。そうするなら、必ず「ふさわしい助け手」(自分の伴侶)に出会うのです。主の口(男性形)とそれを集める御霊(女性形)は一對だからです。

# 「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、  
まだなされていないことを昔から告げ、

『わたしの計画は成就し、  
わたしの望むことをすべて成し遂げる』という。

①ここには強調するために、パラレリズム修辞法が使われています。

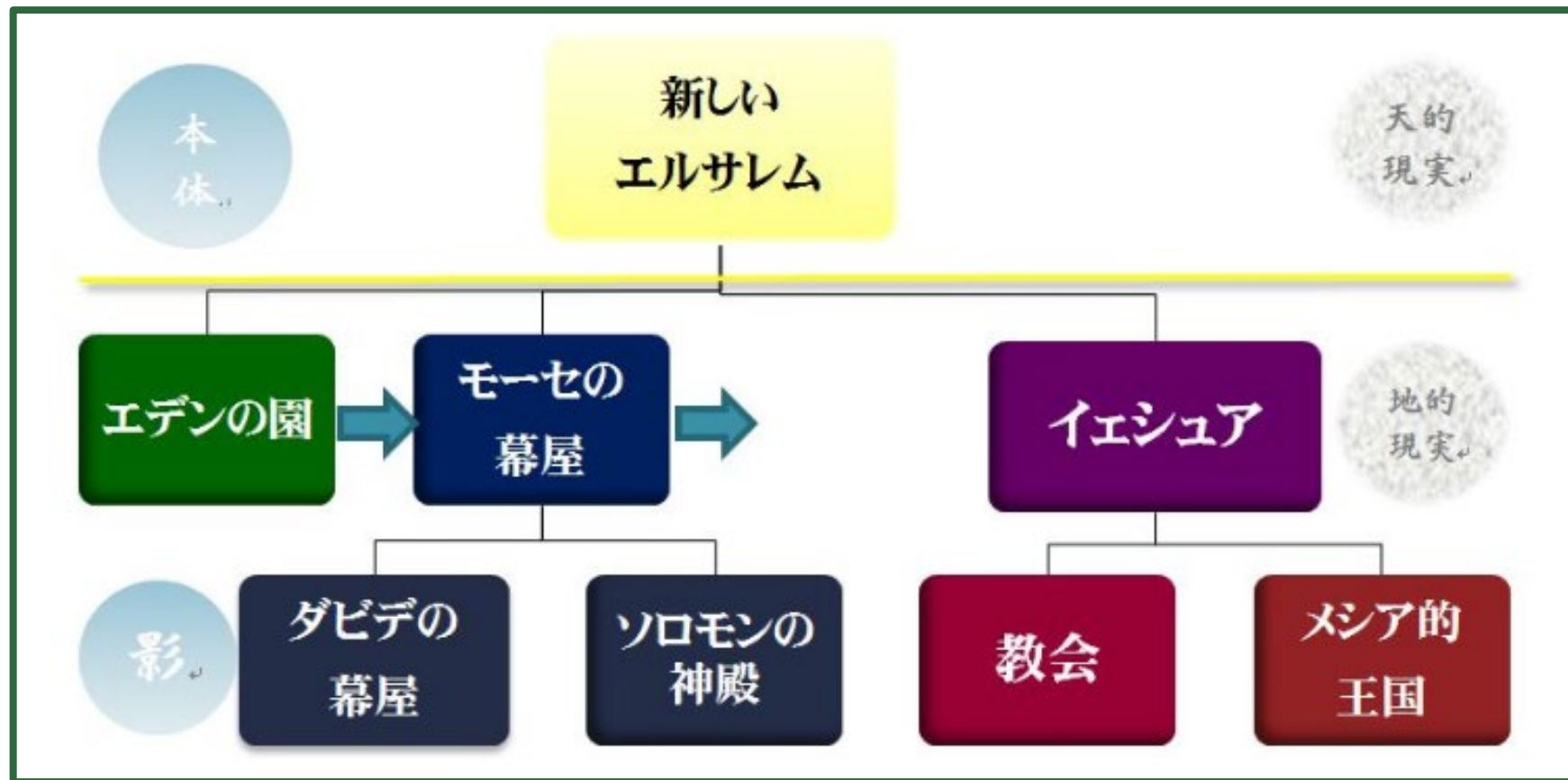
②初めのなかに後のこと、まだなされていない将来のことが  
折り重なるようにして(重層的に)告げられているということです。

「・・・こと」とは「神のご計画」のことです。

これを知るためには、たましいではなく、霊の中で悟る必要があるのです。

# 「エデンの園」の本体は「新しいエルサレム」

- それは「天」にあり、しかもすでに完成されているのです。



# 1. 前回の復習 ①

(1) 「わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」

●神である主が人に対して、「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう」と言われたことを学びました。「人がひとりであるのは良くない」ということばの中に、三一の神の愛の交わりの神秘、相互内在という奥義が隠されています。

(2) 「人には、ふさわしい助け手が見つからなかった」

●人は、「すべての家畜、空の鳥、すべての野の獣」の中に「ふさわしい助け手」を見つけることはできませんでした。神である主はそのことを教えるために、それらを連れて来たのでした。なぜ彼らのうちに「ふさわしい助け手」が見つからなかったのかと言えば、彼らの中に「霊」がなかったからです。このことはきわめて重要です。人にとって、同じ「霊」をもった助け手が不可欠だからです。「人がひとりであるのは良くない」という根源的理由は、①神が霊であること、②神が永遠の交わりの存在であること(創1:26「われわれ」)、③その神の交わりに似せて人が造られていることです。

# 1. 前回の復習 ②

## (3) 「ふさわしい助け手」

- 私たちは「ふさわしい助け手」を生物学的な「女」だと安易に考えてしまいます。しかしここで言っている「ふさわしい助け手」とはより深い意味を持っています。「助け手」の唯一の条件は霊的な存在であるということです。それは花婿なるキリストにとっての花嫁(教会)がそうであると同時に、その両者を支える「御霊」も「助け手」として存在し、そこに「三一」が反映しています(御霊と花嫁が言う。「来てください。」黙示22:17)。
- イザヤは処女から生まれる「みどりご」の名を「不思議な助言者」、また「力ある神、永遠の父」とも呼ばれると預言しています。使徒パウロは「主は御霊です」(Ⅱコリ3:17)とも言っています。三一の神はゆるぎない永遠の愛の交わりの中に存在し、その交わりの中に人が造られ、生かされているのです。ヨハネはこの交わりを「永遠のいのち」と言っています。

## 2. 21節のテキスト ①

### 【新改訳2017】 創世記2章21節

神である主は、深い眠りを人に下された。  
それで、人は眠った。主は彼のあばら骨の一つを取り、  
そのところを肉でふさがれた。

### 【聖書協会共同訳】

そこで、神である主は人を深い眠りに落とされた。  
人が眠り込むと、そのあばら骨の一つを取り、  
そこを肉で閉ざされた。



## 2. 21節のテキスト ②

エローヒーム アドナイ ヴァヤツペール

וַיִּפֹּל יְהוָה אֱלֹהֵים

神である主は 落とした(下した) [נפל]

ミツツアルオーターヴ アハット ヴァイツカハ ヴァイーシャーン アル・ハーアーダーム タルデーマー

תַּרְדָּמָה עַל־הָאָדָם וַיִּשָׁן וַיִּקַּח אֶחַת מִצְלָעָתָיו

彼のあばら骨から 一つを (主)は取った 彼は眠った その人の上に 深い眠り  
あばら骨(女複数) [צלעות] [לקח] [ישן]

タフテンナー バーサール ヴァイスゴール

וַיִּסְגֹּר בְּשָׂרׁ תַּחֲתָנָה

その代わりに 肉を (主は)閉じた

[סגר]

## 2. 21節のテキスト ③

●21節には、多くの新しい語彙が登場します。

「取る」(「ラーカハ」 $\text{h}^{\text{a}}\text{q}^{\text{a}}$ )は、すでに15節で「連れて来る」という意味で使われており、21, 22, 23節でも繰り返されます。「ラーカハ」には「めとる(娶る)、召す」という意味があります。人に「ふさわしい助け手」を造るための神の行為として使われています。

●21節には、次頁にあるように、8つの新しい語彙が登場します。そこで質問です。今回、登場する語彙の中で最も重要な語彙(中心的な語彙)は何だと思われますか。

## 2. 21節のテキスト ④

- ① 「深い眠り」 (「タルデーマー」 תַּרְדֵּמָה) 「熟睡する」 (רָדַם)
- ② 「下された」 (「ナーファル」 נָפַל) 「眠りに落とす」
- ③ 「眠った」 (「ヤーシャン」 יָשַׁן) 「眠りにつく」
- ④ 「あばら骨」 (「ツエーラー」 צִלְעָה) 「肋骨」
- ⑤ 「ひとつ」 (「エハット」 אֶחָד)
- ⑥ 「そのところを」 (「タフテンナー」 תַּחְתָּנָה) √ תַּחַת
- ⑦ 「肉」 (「バーサール」 בָּשָׂר)
- ⑧ 「ふさぐ」 (「サーガル」 סָגַר) 「閉じる、戸を閉める」

### 3. 「深い眠り」の奥義 ①

- なぜ、神が人を深い眠りに落とさなければならなかったのでしょうか。「深い眠り」と訳された語彙は「タルデーマー」(תַּרְדֵּמָה)で、この語源は「熟睡する、意識を失う」を意味する「ラーダム」(רָדַם)です。「タルデーマー」は人の意識の及ばないところにおいて、神の意思が現される時に用いられています。旧約で7回使われています。
- 聖書において、「眠り」は「死」を意味します(創世47:30、I列王11:21、II歴代26:23、使徒7:60参照)。最後のアダムであるイエシュアについて、パウロは「今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」と述べています。創世記2章は預言書です。つまり後に起こることを告げており、イエシュアを証ししているのです。

### 3. 「深い眠り」の奥義 ②

●創世記15章12節では、「**深い眠り**」がアブラハムを襲ったときに、神のことばが彼に臨みます。そして神は切り裂かれた動物の間を通り過ぎることによって、一方的に契約を成立させています(15:17)。その契約は「**かまど**」(「タツヌール」 $\text{קמח}$ )と「**たいまつ**」(「ラツピード」 $\text{קנף}$ )に示される預言的啓示です。それはイスラエルの「**死と復活**」を通してなされる神のご計画を意味するものでした。イスラエルの歴史における神のご計画は、「かまど」と「たいまつ」という二つのことばによって表されます。

●「**かまど**」はイスラエルの民が苦しみと試みの中を通らされることを示し(エジプトでの奴隷、バビロンでの捕囚、世界各地への離散、未曾有の苦難)、「**たいまつ**」はそうした状況からの解放を啓示しています(出エジプト、バビロンからの帰還、反キリストによる未曾有の苦難からの救いーメシアの地上再臨)。創世記1章では「**夕があり、朝があった**」。

## 4. 「あばら骨」の奥義 ①

● 「あばら骨」と訳された「ツエーラー」(צַוּרָה)は、他に「側、板、とびら、脇間、梁」とも訳されます。言わば、この語彙は幕屋・神殿用語、もしくは建築用語です。この語が40回使われているにもかかわらず、「あばら骨」と訳されているのは、創世記2章21節と22節の二箇所だけです。その他は、幕屋について書かれている出エジプト記25～38章では板によって構成される幕屋(至聖所と聖所)の「相對する側面」を意味します。ソロモン神殿についてのI列王記6章、そして千年王国における新しい神殿の幻が書かれているエゼキエル書41章では「脇間」とも訳されています。いずれにしても、幕屋および神殿を建て上げるために、なくてはならないもの、それが「ツエーラー」(צַוּרָה)です。しかしそれは表面的な意味でしかありません。

## 4. 「あばら骨」の奥義 ②

● 「あばら骨」(צָרַע)の語源である「ツァーラ」(צָרַע)には、「**びっこをひく、足を引きずる**」という意味があります。「あばら骨」と「足を引きずる」ことにどんな関係があるのでしょうか。ヤコブが「ある人」(ホセア12:4「御使い」)と戦ったあとに、「彼はそのもものために足を引きずっていた」とあります(創32:31)。兄エサウと再会するにあたって、かつて兄から長子の権利を奪ったヤコブには恐れがありました。恐れに支配されていたヤコブを助けるために、「ある人」が神から遣わされます。ところが「ある人」は強情なヤコブを見て、彼の股関節を打ちます。股関節とは人を支える重要な部分を象徴しています。その部分が格闘の中で外れたということは、ヤコブを支えているもの(たましい)に神が触れたことを意味します。それはヤコブが弱い者(=助けを必要とする者)に変えられたことを意味するのです。ヤコブのこの経験は、彼にとって霊的変革を余儀なくされる出来事でした。

## 4. 「あばら骨」の奥義 ③

●主が人(アダム)のあばら骨を取ったことと、神がヤコブの股関節を外したことには、共通点があります。その共通点とは、人もヤコブも、神(あるいは、他者)の助けなしには生きていけないようにされたという点です。アダムが「ふさわしい助け手」なしに与えられた使命を果たすことができないということと、ヤコブが神の助けなしにその使命を果たすことができないことは同義です。ヤコブが「イスラエル」に改名されたのは、「神が支配する」者とされたことを意味しています。

●「イスラエル」(יִשְׂרָאֵל)は「支配する」を意味する「サーラル」(שָׂרָר)の未完了形「ヤーサル」(שָׂרַר)に、神である「エール」(אֱלֹהִים)が付いて「神が支配する」という意味になります。 **ヤコブ=イスラエル=足を引きずる者(ゼパニヤ3:19)**



## 4. 「あばら骨」の奥義 ④

● マラキ書2章15節はとても難解な節とされ、多くの訳と多くの解釈がなされている箇所です。そこには「あばら骨」ということばはありませんが、「**一体**」ということばがあります。

【新改訳2017】マラキ書2章15節

神は人を**一体**に造られたのではないか。そこには、**霊の残り**がある。その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、自分の霊に注意せよ。あなたの若いときの妻を裏切ってはならない。

※ 「**霊の残り**」ということばを聖書協会共同訳は「**霊と肉**」とし、フランシスコ会訳は「**命の息と肉**」としています。

## 4. 「あばら骨」の奥義 ⑤

●創世記2章21, 22節の「あばら骨」を、マラキ書では「霊」(かゝ)としています。神である主は、ふさわしい助け手を造るにあたって、すでに人に吹き込んだ霊(いのちの息)を、あばら骨を通して女にも注ぎ込んだと考えられます。それゆえ人(アダム)は自分から女に注がれた霊を慕い、女の中にある霊も元のアダムの霊を慕い、二人が結婚して一体化した時、真の満足感が与えられるのです。つまり二人には同じ霊があるということです。

●これは神と人とのかかわりにおいても同様です。神と人には同じ霊があるのです。それゆえ、世を愛することは、神に敵対することを意味します。「神は、私たちのうちに住まわせた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」(ヤコブ4:5)ということが、その事実を裏付けています。

※「私たちのうちに住まわせた御霊」とは、私たちの霊の中に内在される御霊のことです。

## 5. 「一つ」の奥義

- 「主は彼のあばら骨の一つを取り」とあります。「一つ」と訳された語彙は「エハット」(אֶחָד)です。ヘブル語では「一つ」は部分ではなく、全体を意味します。たとえば、神の「顔・頭・目・瞳・口・耳・手・指・腕・足」など、からだの一部分を用いながら、神全体を表します。これは人間でも同様です。今回の「あばら骨の一つを取る」ということは、あばら骨全体を意味し、人の最も重要な部分である「霊」を意味しています。このような考え方はヘブル人特有のもので、集合人格、つまり「個が全体を代表する」という概念です。
- 詩篇27篇4節の「一つのことを私は主に願った」の「一つのこと」も「エハット」、ルカ10章42節の「必要なことは一つだけ」の「一つ」も「エハット」です(名詞か形容詞かの違い)。これは神のご計画における最も重要な事柄全体を意味するとともに、神の永遠の目的をも啓示しているのです。

## 6. 「肉」の奥義

●さらに、「主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた」とあります。あばら骨が取られた隙間の部分を、肉でふさぐとはどういうことでしょうか。「肉」と訳された語彙は「バーサール」(בָּסָר)で23節にも登場し、24節では「一体」(「バーサール・エハード」בָּסָר וְעֶחָד)で使われています。ここで人が「あばら骨」と「肉」、つまり「霊」と「たましいとからだ」から造られていることを初めて記しているのです。

●ヘブル語の「バーサール」は「肉、からだ」を意味します。ギリシア語の「肉」(「サルクス」σάρξ)は、「たましい」(「プシュケー」ψυχή)と「からだ」(「ソーマ」σῶμα)を含んだ語彙です。ちなみに語源の「バーサール」(בָּסָר)は「良きおとずれを告げる」という意味があります。それは最後のアダムが遣わされて、肉において罪を処罰し(ロマ8:3)、いのちを与える御霊となって人の霊を回復し、その中に入ってくださいったことによって、たましいもからだも包括的に新しい創造がなされたからです。

# 今回のまとめ

● 「**霊と肉**」の奥義を啓示された人は使徒パウロです。「あばら骨と肉」を「**霊と肉**」と言い換えるならば、それはエデンの園の中央にある「いのちの木と善悪の知識の木」の組み合わせと同じです。人間が「バーサール」(בֶּרֶסְרָל)、すなわち「肉に従って歩む」とは、「善悪の知識の木」だけを食べて生きることの意味し、「罪と死の律法」に従って歩むことです。それゆえ、それは死を意味するのです。

【新改訳2017】ローマ人への手紙8章2～4節

- 2 なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです。
- 3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。
- 4 それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。